あとがき　第28回オマージュ瀧口修造展

「事物と気配 大辻清司の写真」作品45点に寄せて

佐谷和彦

佐谷画廊恒例のオマージュ瀧口修造展は今回で28回を迎える。考えてみるとここまで出来たのは思いもせぬことで、実は第10回(1990年)の時点でひとまず止める気持ちもあった。それが続くことになったのは、山口勝弘さんと秋山邦晴さんが私の画廊を訪ねてこられ、瀧口修造の命名で若い作家・音楽家たちで1951年に結成された「実験工房」について熱心に話をされたことがきっかけだった。お二人は当時まだ名のみ高くその実体は不明の存在であった「実験工房」の活動を明らかにしておきたいと提案され、私もこれは素晴らしいと考え、第11回オマージュ瀧口修造展としてやることに決めたのである。山口、秋山両氏に責任者となっていただき、カタログは資料性の高いものにしたいと英文併記とし思い切って800万円を投じた。編集は福住治夫さん、デザインは大石一義さんに依頼した。

「実験工房」は大辻清司、北代省三、駒井哲郎、福島秀子、山口勝弘の造形部門と、佐藤慶次郎、鈴木博義、園田高弘、武満徹、福島和夫、湯浅譲二の音楽部門、そして詩・評論の秋山邦晴、照明の今井直次、技術の山崎英夫で構成されたゆるやかなインターメディアのグループである。第11回オマージュ瀧口修造展ではこのうち、展示作品のない今井直次、園田高弘、山崎英夫を除く11名の作品を展示した。カタログには瀧口修造のテキストを再録し、山口勝弘、秋山邦晴の解説と、北代省三がまとめた年譜と写真資料、そして当時既に亡くなられていた山崎英夫、駒井哲郎を除くメンバーによるコメントを掲載した。

かくして1991年7月、第11回オマージュ瀧口修造展「実験工房と瀧口修造」は開催の運びとなった。しかしこの1991年をピークに、以降わが国の美術界の経済状況は落ちるばかりで、今考えても、やれるときにやっておいて良かったと思っている。現在の美術界の状況については、拙稿「美術行政はこれでよいのか」(『みすず』2005年3月号)をお読みいただければご理解いただけると思う。

この第11回オマージュ瀧口修造展「実験工房と瀧口修造」で私は初めて直接、大辻清司さんとお会いしたのである。この時は1948年から1958年までの写真作品12点を出品していただいている。その後、昨年2005年7月に開催した第26回オマージュ瀧口修造展「瀧口修造とタケミヤ画廊」にも作品4点を展示した(大辻さんは1952年8月に小川義良とタケミヤ画廊で二人展をしている。)が、いずれも共感を得るもので、今回改めてオマージュ展でご紹介することとなった。2つの展示室に「モノ」をテーマにした写真作品(1949年～1980年)30点、および瀧口修造

実験工房メンバー
前列左から、瀧口修造、園田高弘夫妻、福島秀子、武満徹、湯浅譲二、鈴木博義、佐藤慶次郎
後列左から、大辻清司、秋山邦晴、山口勝弘、駒井哲郎、福島和夫、今井直次
1954年(撮影者の大辻に代わって、この一枚は北代省三がシャッターを押している。)

佐谷画廊「第11回オマージュ瀧口修造展 実験工房と瀧口修造」会場に集まったメンバー
左より北代省三、秋山邦晴、佐谷和彦、山口勝弘、大辻清司、駒井美子(駒井哲郎夫人)、園田高弘、福島秀子、福島和夫、武満徹、今井直次、湯浅譲二、鈴木博義、佐藤慶次郎
1991年
撮影/斎藤さだむ

の書斎を記録した作品15点の計45点を展示する予定である。

ここにその1枚の書斎の写真がある。珍しくカメラの前で瀧口先生と綾子夫人がはにかむように微笑んでおられる。私は本棚に納められたおびただしい本、画集、絵画、オブジェに囲まれ、瀧口先生が小さな椅子にチョコンと座られていたのを懐かしく思い出す。テーブルのまわりは、本や雑誌やカタログや手紙が押し寄せ、まるで海のようであった。今は取り壊されもはや訪ねることの叶わないあの書斎を、大辻さんは丹念に写真におさめられた。今回の展示で、あの小宇宙を再び

書斎の瀧口夫妻　1975年

目にすることを私は楽しみにしている。

大辻さんは写真家としてだけでなく、教育者としての評判も高いことを申し添えておきたい。詳しくは年譜をご覧いただくとして、ここに名のみ列挙すると、桑沢デザイン研究所、東京造形大学、筑波大学、九州産業大学、東京綜合写真専門学校、武蔵野美術大学で長らく教鞭をとられ、大辻さんに学んだ多くの学生が優れた写真家として活躍している。

大辻さんを写真家の道へと導いたのは、写真雑誌『フォトタイムス』であったという。少年時代に古書店でまとめて入手した1938年から1940年までのバックナンバーには、ムンカッチ、ブルーメンフエルト、マン・レイ、モホリ=ナジ、ケペッシュ等の海外の作家の写真作品が紹介されており、瀧口修造の評論が掲載されていた。瀧口先生は内科・眼科医だった父上の趣味もあって、幼い時からカメラを扱うことに慣れておられたと、大辻さんはのちに記されている。瀧口先生は、1930年代後半にはシュルレアリスムの絵画と並行して、写真や映画にも強い関心を持たれていた。なるほど、みすず書房の『コレクション瀧口修造』全14巻のうち、第1回配本は1991年1月発行の『映像論』(第6巻)である。

この『フォトタイムス』が大辻さんの瀧口修造を知った始めであった。購入した

のは1940年、東京府立第七中学校の学生であった17才の年である。その選択には驚かざるを得ない。

大辻さんより5才若い私も、瀧口先生を最初に知ったのは学生時代に読んだ美術雑誌によってである。美術が好きだった祖父が収集していた日本画を、月毎に3カ所の床の間に掛けるのが幼い頃のしごとであった私は、やはり美術の好きな少年で、その後、金沢の旧制第四高等学校の理科甲類に入学したものの興味は美術や文学にあり、特に瀧口先生の書かれた美術雑誌を熱心に読むようになった。中でも『創美』第4号(1948年)の「抽象と具象」には強い感動を得たことをよく覚えている。

四高を卒業後、文学部の美術史専攻を希望したが父の反対で叶わず、京都大学経済学部を卒業し20年間、農林中央金庫に勤めた。1973年、故あって志水楠男氏の南画廊に入り現代美術の世界で働くこととなる。瀧口先生と親しくさせていただいたのはこの頃からで、しばしば先生の西落合の書斎で尽きることのないお話を伺った。先生の体調を心配して話を切り上げるのは常に私であったが、亡くなられる1979年までの6年余、貴重なマン・ツー・マンの勉強をさせていただいたと思っている。1978年に佐谷画廊を開設、第1回企画としてエルンスト・タンギー二人展を開催した際も「あなたの最初の企画展のお祝いに」との手紙とともに、アクロスティック「Pour ERNST pour TANGUY」を贈ってくださった。

瀧口先生の3周忌を迎えた1981年、私は第1回オマージュ瀧口修造展を開催した。瀧口修造のしごとをもっと多くの人に知ってもらいたい、そのために画商として自分のできる範囲でやっていこうと考えたのである。以降毎年、瀧口修造および瀧口ゆかりの作家のしごとを紹介してきた。農林中央金庫からルビコンを渡る思いで画廊のしごとに飛び込んだ時、瀧口先生からいただいた1通の手紙に「今度のお仕事は何かとご苦労が多いものとお察しいたしますが、とりわけ日本のこの方面はまだまだ処女地(随分荒らされてはいますが)で、開拓を待つところが多く、それだけ張り合いのあるものと確信いたします。」とあった。この励ましを支えに、またそれに応えるべく、私は現在までライフワークとしてオマージュ瀧口修造展を続けてきたのである。

最後になりましたが、今回の展覧会開催に快くご協力いただいた夫人の大辻誠子さんをはじめ、大日方欣一(写真評論家)、井上和明(ギャラリーパストレイズ主宰)、小平雅尋(写真家)、大石一義(カタログデザイン)の各氏に厚く御礼申し上げます。このほかにもここにお名前を記すことができませんが、多くの皆様にご協力をいただきました。ありがとうございました。私の企画をご理解くださっている瀧口先生のご遺族の鈴木陽・みつ子夫妻、河村真弓さんにも深く感謝申し上げます。

2006年8月